

2025年度 公募推薦選抜問題 (90分)
B 日程 11月10日(日)

基礎学力テスト

英 語	1～8 ページ
数 学	9～13 ページ
国 語	15～27 ページ

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 上記の科目から2科目選択してください。
3. 解答用紙には、英語・国語(赤色)・数学(青色)の3種類があります。
4. 試験開始後、解答用紙に受験番号と名前を必ず記入し、受験番号をマークしてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄にマークしてください。
6. 問題用紙の余白は計算に使用してもかまいませんが、解答用紙を汚してはいけません。
7. 試験開始後、問題用紙・解答用紙に落丁・損傷がないか確認してください。
8. 数学の問題の冒頭には「解答上の注意」が記入されていますので、必ず読んでから解答してください。
9. 解答済みの答案は、2科目重ねて提出してください。
10. 不要になった解答用紙も回収します。
11. 試験終了後、問題用紙は持ち帰ってください。

国語

1 次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 ア～ウの傍線部のカタカナに相当する漢字を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

1、2、3

ア 人ごみのカングキを縫って前に進む。

- ① 隙 ② 激 ③ 劇 ④ 撃

イ 臆面もなくチンプなせりふを吐く。

- ① 賃 ② 陳 ③ 鎮 ④ 珍

ウ シュクゼンとした雰囲気のなかで式が進行する。

- ① 縮 ② 祝 ③ 淑 ④ 肃

問2 ア～エの四字熟語の空欄 4、5、7 に入る漢字を、次の①～⑨の中からそれぞれ一つ選びなさい。

4、5、6、7

ア 一 4 一会の縁と申って相手と接する。

イ 雪辱を果たすため、臥 5 嘗胆の日を送る。

ウ 牽強 6 会の言い訳をし、非を認めようとしなさい。

エ 不 7 不党の立場で発言を続ける。

- ① 変 ② 付 ③ 語 ④ 寝 ⑤ 悟
⑥ 負 ⑦ 薪 ⑧ 期 ⑨ 偏

問3 ア～ウの筆者の著作を、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つ選びなさい。

8、9、10

ア 井伏鱒二 8

- ① 『放浪記』 ② 『ヴィヨンの妻』 ③ 『カインの未裔』 ④ 『黒い雨』

イ 平野啓一郎 9

- ① 『日蝕』 ② 『共喰い』 ③ 『風味絶佳』 ④ 『ボトスライムの舟』

ウ 室生犀星 10

- ① 『倚りかからず』 ② 『暮笛集』 ③ 『一握の砂』 ④ 『抒情小曲集』

2 次の〈文章Ⅰ〉と〈文章Ⅱ〉を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

〈文章Ⅰ〉

人々の住宅をめぐる選択は、都市空間がどのように広がるかによって大きな影響を受ける。都市空間の広がり、住宅に不可欠な土地の供給にかかわるからである。都市の中には、境界が不明確なままにその外延を広げていく都市もあれば、そうではなく境界によって囲われた都市もある。都市空間に広がる余地がなければ、住宅を増やすのは困難となり、価格が上がるだろう。そして、そのような都市空間の広がり、それを決定する政治と密接にかかわっている。

都市空間の広がり、それを制約する代表的なものは、都市の境界を定める城壁のようなものだろう。日本の場合も近世において、京都をはじめとした一部の都市には惣構そうがまえと呼ばれる防衛施設があったと言われる。しかしながら、それは例外的で、日本の都市には都市を取り囲む城壁のようなものはほとんど見られない。それに対してヨーロッパの都市は、その多くが高い城壁に囲まれて、明確な境界を持っていたとされる。「都市の空気は自由にする」という言葉があるが、これは封建領主の支配下にあった農民が領主の支配から逃れ、城壁に囲まれた都市の中で一定期間を過ごせば領主から解放されたことを言う。つまり、政治権力によって城壁などの明確な境界で都市という空間が限定され、その中で「自由」が認められたのだ。

現代では、ものものしい城壁こそなくなっているが、ヨーロッパの多くの都市では厳しい規制が行われ、都市が無秩序に広がっていくことは少ない。そのように都市に境界があることは、人々が居住することができ空間を限定することにつながる。「都市の空気は自由にする」といっても、多くの人が自由を求めて都市に流れ込んでいくと、都市の内部では人が増えすぎて過密が問題になり、人口の増加が制約される。他方、日本の都市のように、水平方向への制約が弱いと、発展する都市では住宅が平坦して拡大していくことができる。新しく都市に流入してくる人々は、相対的に住宅サービスが安く提供される周辺部に住み、都心部と周辺部を結ぶ公共交通機関の発展とともに、都市の面積も広がっていくのである。単に面積が拡大するだけでなく、境界が明確ではない都市の方が、多くの人々の流入を可能にすることで経済的にも重要な地位を占めるようになっていくという指摘もある。

都市の中心で、人々や様々なサービスが集積している地域は利便性が高く、住宅の需要に比べて供給が少ないので価格が高くなる。これはすでに確認したように、東京の都心で住宅価格が非常に高いのを想起すればよい。都市に集まってくる人々――特に都市に経済的なチャンスを求める人々――は、必ずしも十分な資源を持っているわけではないので、都心の高い住宅費を支払うことはできず、まずは価格が比較的安い周辺部に住むことが選択肢となりやすい。そういう人々に対して、都市の側ではたとえば周辺部の農地を宅地に転用して、安い住宅サービスを供給することもできる。しかし、農地の転用規制が厳しいことなどによって都市の境界が明確な場合、このようにはいかない。（Ⅰ）安い住宅を広く供給しようとすれば、決められた境界の中で再開発を行い、たとえば平屋の一戸建ての住宅があった土地に、より床面積の大きい高層の集合住宅を建てるなどして都市空間を垂直方向に拡大させて住宅を増やしていく必要がある。ただし、こうした再開発には反対がつきもので、そのためになかなか都市人口が増えにくいということになる。

人口増を好ましいものと考えれば、都市空間を制約する必要などない方が良さそうに思えるが、持続可能性という観点からは利点もある。ポイントは土地の高度利用である。都市の境界が明確だと、人を呼び込み集積を作っていくためには、高層化を進めるなどして希少な土地をより効率的に利用していかななくてはならない。再開発への反対を押さえる政治権力が必要だが、それに成功すれば、小さく

とも効率的で、持続可能な都市を形成することができる。逆に、都市の境界が不明確で、都市が拡大していくことが可能であれば、土地の高度利用への要請は弱くなる。そのような努力をしなくても住むところを確保できるからである。そして、それは常に新しく安価な住宅サービスが供給される「C」郊外」という都心に対する競争相手が現れることを意味する。(Ⅱ)

都市が徐々に拡大し、高度利用がされないままに都心の集積の魅力が減ると、人々が都心から郊外へと移っていくことも考えられる。郊外へと人々が住み始める中で、都心を常に魅力的なものへと改善し続けるのは、都市の境界が明確である場合よりもおそらく難しい。(Ⅲ) 都心の再開発に取り組まなくても、郊外の住宅開発という相対的に容易な選択肢が存在するからである。郊外に多くの人が住むようになり、公共交通機関ではなく自動車での移動が容易になれば、郊外に人々を集める魅力的な施設もできるだろう。そうすれば、郊外に住む人々にとって都心の魅力が相対的に下がっていくことも考えられる。

利便性の高い場所に位置する古くなった住宅を取り壊して新しく高層の集合住宅を作れば、多くの人がより安価で利便性の高い住宅を取得することができる。そんな持続的で効率的な土地利用は望ましいだろうが、言うまでもなく非常に難しい。(Ⅳ) たとえば日本でも、一九八〇年代末のいわゆるバブル経済の頃には、将来的な土地の値上がりを狙って強引な「地上げ」が社会問題になった。単純に、人々がその土地に住む権利を侵害されるというだけではなく、将来的に利益が見込まれるような土地の場合は、居住者側もなるべく高く売りたいので、利益分配をめぐる買い手との折り合いがつきにくくなる。

すでに人々が住んでいる状態で、その移動を促し、土地の価格を調整するような政治権力は非常に強烈である。そういった権力を忌避する意見は少なくないし、またその権力を行使する側としても、困難を含む選択である。なぜなら、権力を行使してうまくいけばよいが、失敗すればD 激しい批判を受けるからである。移動を余儀なくされた人々、あるいは郊外で住宅を安価に購入できなくなる人々に対して住まいを提供することも求められる。(Ⅴ) それに対して、たとえば公営住宅というかたちで税金を投入して安価な住宅サービスを提供しようとすることもできるが、今度は公営住宅を利用しない納税者、特に自ら住宅を購入した人々から批判を受けるだろう。様々な批判や抵抗を引き受けながら意思決定を行うプロセスは、政治権力にとっても自らの正統性を揺るがしかねない。

政治権力が、都市空間を強く管理することができれば、土地利用の高度化を図ったり、住宅を提供して人々の移動を促したりすることによって、都市への求心力を持続させることができるかもしれない。しかし、そのための説得や補償には大きな費用がかかると考えられる。他方で、都市空間の管理を積極的に行わず、放任するのであれば、人々の住宅をめぐる選択が市場に委ねられる部分はより大きくになると考えられる。しかし政治権力が抑制的であれば、都市の過密に対して有効な手段を講じることが難しくなるだろうし、拡大しすぎた都市は持続可能とは言えなくなるかもしれない。いずれにしても、政治権力がどのように都市空間を管理するかということが、私たちの住宅をめぐる選択と深くかかわってくるのである。

〈文章Ⅱ〉

分譲マンションの大衆化は進んだが、分譲マンションを含めた集合住宅が、何の抵抗もなく増加していったわけではない。集合住宅は、大規模なものであるほど「迷惑施設」としての性格を持ち、建設を予定する地域からの反発を受ける可能性がある。初期の公団住宅は、大量の新住民が流入することによる上下水道や道路のような社会資本整備の必要性、そして小中学校・保育所建設などの要請が

ら、それを負担することになる地方自治体によって避けられて、次第に都心から遠い地域に建設されるようになっていった。

公団住宅は政府機関によって建設されるものだが、分譲マンションは、基本的に民間事業者によって建設されるものである。地方自治体による開発規制が緩いために、分譲マンションを建設しようとする事業者は土地を取得して開発行為を容易に進めることができる。そのため、その過程で自治体や既存の地域住民と紛争を起すことは決して少なくなかった。一部の自治体では、開発行為に対する条例による規制が困難な中で、法的な根拠のない行政指導を行うことで開発を止めようとした。たとえば武蔵野市は、一定以上の大きさのマンション等を建築する際には教育負担金を納付することを求め、従わなければ水道の供給を止めるという行政指導を行ったが、これは違法行為として裁判で敗訴している。

より激しいのは、民間事業者と既存住民という私人間での、建物の高さをめぐる対立である。一九六七年には東京で高層の分譲マンションが隣家の日照を遮蔽したことが訴えられた事件について、最高裁が損害賠償を命じた判決を下し、その後「日照権」を根拠とした建設反対の住民運動が増えるようになった。既存の住民としては、日照時間が短くなって日光を浴びることができなくなるだけでなく、それによって資産価値が下がるということで、激しい反対を起こしたのである。

（〈文章Ⅰ〉〈文章Ⅱ〉はともに、砂原庸介『新築がお好きですか？——日本における住宅と政治——』による。なお、本文中に一部省略したところがある。）

問1 次の一文は、本文中の（Ⅰ）～（Ⅴ）のうち、どの部分に付け加えることができるか。最も適当なものを、後の①～⑤の中から一つ選びなさい。

11

現実に人が住んでいるからである。

- ①（Ⅰ） ②（Ⅱ） ③（Ⅲ） ④（Ⅳ） ⑤（Ⅴ）

問2 傍線部A「水平方向への制約が弱い」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当

なもの、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

12

① 政治権力によって都市という空間が限定されていたヨーロッパの都市と異なり、歴史的に領土の支配意識が薄かった日本では、領地間の境界が不明確なままに、その外延を広げていったということ。

② 国土が狭いうえに山間地の多い日本では、ヨーロッパのように大きな都市を広い範囲で展開することが困難であるため、制約なしに都市の規模を水平方向に広げていくことが難しいということ。

③ 高い城壁に囲まれて境界が明確なヨーロッパの都市と異なり、都市を取り囲む城壁がほとんどない日本では、都市の面積が無秩序に広がり、人口も制限なく増加していく可能性があるということ。

④ 都市に境界があり、居住空間を限定することで人口の増加を制約してきたヨーロッパと異なり、人口の増加に制限を設けなかった日本では、都市に流入する人々が増加する一方であるということ。

⑤ 都市空間が限定されているヨーロッパと異なり、東京の都心のように人口と住宅の数のつり合いが取れなくなると、人々は住居を求めて比較的価格が安い周辺部に住むことになるとのこと。

問3 傍線部B「こうした再開発には反対がつきもの」とあるが、これについて〈文章Ⅱ〉ではどのように述べられているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 13

- ① 集合住宅建設により新住民が大量に流入すると、建設予定地域の風習や伝統文化が失われるおそれがあるため、旧住民らの反発を招くことがあった。
- ② すぐ近くに高層建築物ができると、圧迫感が生まれたり、風通しが悪くなったりするといった問題が起ころるので、建設反対の住民運動が増加していた。
- ③ 一部地域では、分譲マンションの建設事業者による開発行為を法令で規制しようとして条例制定に至るほど、地域住民や地方自治体は反発を強めた。
- ④ 高層マンション建築に対する反対は、住環境の変化への不安だけでなく、環境悪化によって周辺住民の資産価値が下がるという危機感も原因となった。
- ⑤ 分譲マンション建設により児童・生徒数が急増する地域では、小中学校の建設の必要性に迫られる地方自治体の負担が増え、紛争になることがあった。

問4

傍線部C『郊外』という都心に対する競争相手』について、高校生5人が話し合っている。〈文章Ⅰ〉における「郊外」と「都心」の説明として適当でないものを二つ、次の①～⑤の中から選びなさい。ただし、解答の順序は問わない。 14 ・ 15

- ① Aさん…「郊外」とは、都市の外延として都市部に隣接した地域のことだよ。郊外は、都市部より家賃が安いから住みやすく、都心に通勤・通学するには利便性が高い地域としても発展していくから、都心の競争相手になるんだね。
- ② Bさん…都心の「競争相手」と表現しているのは、みんなが都心を出て郊外に住みたがるようになるからだね。つまり、豊かな自然環境とか、娯楽施設の多さとか、都心にならない良さが、もともと郊外にあるということだろうね。
- ③ Cさん…郊外に多くの人が住むようになると、郊外の開発が進んで大規模商業施設ができたり都心と郊外を結ぶ公共交通機関の便が良くなったりする。そうなると郊外がもつと住みやすくなり、都心の魅力が薄れるんだと思うよ。
- ④ Dさん…都心の高度利用ができる場合、タワーマンションはそのいい例だ。一戸建てや小規模の集合住宅に比べて、同じ面積の土地にはるかに多くの人が住めるからね。だから、購入価格がもつと安ければいいのにと思うよ。
- ⑤ Eさん…高層マンションは家賃がかなり高いから、都市の魅力というより高収入の証しのようなものだと思う。多くの人が立地のいい場所に安価な戸建て住宅を取得できるようにするのが、都心の効率的な土地利用の例だと思う。

問5

傍線部D「激しい批判を受ける」とあるが、都市の再開発という名目で政治権力を行使して居住者に立退をさせるとき、「激しい批判を受ける」のはどのような場合か。その例として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

16

- ① 土地の価格を恣意的に調整して、居住者が納得できる立退料を提示しなかった場合。
- ② 代替住宅を購入できない人に対して、住まいを提供する努力をしなかった場合。
- ③ 立退の対象者に、公営住宅という安価な住宅サービスを優先的に提供した場合。
- ④ その土地に住む権利を侵害された人に対する補償に、適切な費用を投じなかった場合。
- ⑤ 住宅をめぐる選択を政治権力が市場に一任した結果、家賃相場が高騰した場合。

問6

〈文章I〉の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

17

- ① 都市の境界が明確な場合、水平方向に都市の外延を広げることができないため、都市に多くの人を居住させるためには、平屋の二戸建ての住宅があった土地に高層の集合住宅を建て、垂直方向に都市を拡大していくことが必要である。
- ② 都市の境界が明確でない場合、都市に流入する人は、都心ではなく相対的に住宅サービスが安く提供される周辺部に住み、それに伴って公共交通機関が発展して都心部との往来が容易になるので、都市空間は徐々に広がっていく。
- ③ 都市の境界が明確な場合、都市空間が制約されるため、多くの人が都市に流入してきたとしても受け皿となる住宅が限られ、結果的に都市の周辺部に居住することになることから、都市の人口の増加には歯止めがかかってしまう。
- ④ 都市の境界が明確でない場合、都市空間はその外延へと広がっていき、安価な住宅サービスが供給される郊外に住むところを確保できるため、今度は人が多く集まる郊外の開発が進み、都心の魅力が相対的に下がっていくことになる。
- ⑤ 農地の転用規制の厳格さにより都市の境界が明確である場合、そのなかで都市に人を呼び込み集積を作っていくと土地がさらに希少なものとなるため、住宅をはじめとする都市を形成する施設全体が高層化していく傾向にある。

3 次の文章を読んで、後の問い（問1～5）に答えなさい。

岩手県盛岡市にある南部鉄器工房「清嘉」の職人・小原悟は、親方である父・孝雄が家族を顧みないことに反発してきた。悟は「盛祥」の社長・清水直弥を訪ねた後に、会長の清水直之助に誘われて、近くの川べりを歩きながら話を聞いている。

「誰にも言ったことはないが、私はあなたのお父さんがずっと羨ましかった」「え？」

思わず短い声が出た。岩手を代表する南部鉄器会社の会長が、どうして清嘉のような小さい工房の親方をそんな風に思うのか。

直之助は歩きながら、話を続ける。

「そう思いはじめたのは、私が親父の跡を継いで社長になったあたりからです。それまでは一日の大半は工房で铸件を作っていたのに、社長室で書類と向き合うことが多くなりましてね。社長とはそういうことだとわかっていたんですが、なってみるととても淋しかった。たまには現場で仕事がしたい、と言っても、社長がいると若手がみんな緊張する、と止められてね。なんだか部屋に軟禁されている気分でした」

^a 直之助は、付け足しのように笑う。

「それでもまだ、身体が丈夫なときはよかった。会社の健康診断で糖尿病と言われてから、さらにできないことが増えたんです。塩分の強い物はダメ、酒もほどほど、甘い物も控えなければいけない。私の祖父も父も糖尿でした。そういう家系なんです。だから私は若いときから暴飲暴食はせず、健康に留意してきました。それなのになってしまいました」

直之助は、隣を歩く悟を見た。

「孝雄さんは、頑固でしょう」

悟は正直に答えた。

「頑固をとおり越して、^c 偏屈です」

直之助は豪快に笑う。

「偏屈ですか、なるほど。そうとも言えるかもしれませんがね」

笑いが収まると、直之助が遠くを眺めた。その視線を悟は追う。ゆつくりと流れる川の向こうに家々

^A の屋根が並び、その奥に岩手山が見えた。

直之助は、視線を自分の足元に落とし、独り言のようにつぶやく。

「確固たる自分の意志があるから、頑固とか偏屈と言われるんです。職人に限らず、なにかを作り出す者はそれが無いといけません。刺激や影響を受けつつも、己を貫きとおす芯がないと、中途半端なものしかできない。節子さんも、孝雄さんのそんなところに惹かれたんでしょう」

「母が父を——ですか？」

悟は驚いて、直之助を見た。

「意外ですか？」

直之助が、悟に顔を向ける。

「ええ、まあ」

曖昧に答える。ふたりの馴れ初めを悟は知らない。訊いたことはあるが、孝雄からは無視され、母には笑顔ではぐらかされた。やがて孝雄を身勝手な人間だと思うようになり、あんな男を母親が好きになるわけがない、半ば強引に孝雄が結婚に持ち込んだのだろう、そう思っていた。

直之助は、面白そうに笑う。

「あなたは反論するだろうけれど、孝雄さんはいい男ですよ。ええ、本当にそう思います」
悟に向けていた視線を、直之助が遠くへ戻した。

c 川から強い風が吹いた。足元の雑草がいつせいに音を立てて揺れる。

「物事には風というものがありましてね。仕事、人生、時代にいろんな風が吹く。穏やかなそよ風もあれば、激しい暴風もある。ほかにも追い風、逆風などがありますが、人はそれらに翻弄されるんです。いい風に乗ったと思ったら、一転して嵐のような風に見舞われ転落したりする。それが世の理^{ことわり}だから致し方ないのですが、それらに立ち向かうために必要なものはなんだかわかりますか」

「なんですか」

訊ねると、直之助はぼつりと答えた。

「強さです」

念を押すように、繰り返す。

「どんな風にも動じない、強さが必要なんです」

直之助は風と言ったが、それは運不運という言葉に置き換えられるものだろう、と悟は思った。真面目、努力、根性といった精神論が通じるものではない。人間がなにをしても、どうにもならないものだ。そんな途方もないものに立ち向かう強さを、孝雄が持っているというのか。

そうとは思えない気持ちが顔に出ているのだろう。直之助は口元に笑みを浮かべながら、悟の顔を横からのぞき込んだ。

「どうしました？」

確信をもって言い切る直之助に、自分はそう思えない、とは言えず、悟は言葉を変えて訊ねた。

「どうして、親父を強いと思うんですか」

直之助は、意外そうな顔をした。

「そんなことは、見ていればわかります。もしかして、あなたはいつもそばにいないのに、わからないんですか」

お前の目は節穴か、そう言われたようで、極まりが悪い。しどろもどろになっていると、直之助が反省するように、したを向いて自分の頭を手で叩いた。

「こりや、言い方がまずかったな。別に責めたわけではありません。そう感じたなら謝ります。私からすれば当然のことだったので、てっきり息子さんのあなたも同じだと思いましたが、距離が近すぎて見えないということも、世の中にはありますからねえ」

直之助は、再び背中で手を組んだ。

「私は、孝雄さんが喧嘩^{けんか}をしているところも、誰かに挑みかかっっていく姿も見たことはありません。

昔からあのとおり無口で、どこか物事を達観している感じで、むしろ小心者のように思っていました」

ふたりがはじめて顔を合わせたのは、孝雄が十代後半、直之助が二十代半ばのころだった。

「もう五十年前にも前になりますが、親密な付き合いはありません。青年会や組合の会議で、年に数回顔を合わせるだけでした。でも、この長い時間のなかで、私は孝雄さんの強さを知りました。清嘉さんがずっと焼型^{やまがた}にこだわっているのも、そのひとつです」

鉄を溶かした湯を流し込む型には、大きく分けてふたつある。生型^{なまがた}と焼型だ。

生型は砂に凝固剤を混ぜて、それをアルミなどの型にプレスした鋳型で、大量生産に向いている。一度にたくさん作れるため、価格が低く抑えられるのが利点だ。

一方、焼型は伝統的な作り方で、細かい作業を入れると百近くの工程が必要となる。そのため、価

格は生型より高い。しかし、細かい模様を施したり、繊細な形を作ることができる魅力がある。

d 直之助は、遠くを見た。

「盛祥もかつては焼型だった。しかし、時代とともに変化する生活様式、職人の高齢化の問題、なにより、南部鉄器の普及のために生型を導入した。それは、正しかったと思っている」

悟は心の中で頷いた。現在は、県内の特産品を扱う店にはたくさんの南部鉄器が置かれ、インターネットでも販売されている。それができるのは、生型で作るようになったからだ。

直之助はそこでひと呼吸おき、話を続けた。

「どちらがいいとか、優れているということではない。だがね、人は自分が選ばなかった道にいつまでも嫉妬するものなんだ。昔ながらの焼型をいまでも主軸にしていたら別な盛祥があったんじゃないか、とね」

その気持ちだが、悟にはわかるような気がした。職人ならば、自分の技術を思う存分発揮できる仕事をきつと望む。

B 直之助は、なにかを吹っ切るように俯き加減だった顔をあげた。

「私だけじゃない。生型を戦力にした工房の経営者の多くが、そう思っているだろう。しかし、そうしなければならなかったんだ。南部鉄器の代わりになる安い製品が溢れる時代を生き抜くには、焼型だけでは難しいんだ。だが、孝雄さんはそこにこだわった」

頑なにやり方を変えない孝雄に多くの人が呆れ、なかには、いずれ清嘉は潰れる、そこを免れてもいまより店が大きくなることはない、そう面と向かって言う人もいたらしい。

「何事もはじめるのは簡単だが、継続がとて難しい。様々な問題が立ちはだかりますからね。自分の迷い、価値観の違い、周囲との軋轢、金銭面。孝雄さんはそれらと闘い、いまでも清嘉を守り続けている。それを強さと呼ばず、なんと言うのでしょうか」

いまの話が孝雄ではなく別な誰かだったら、揺るぎない信念を持つ強い者だと思っだろう。息子としてずっと孝雄を見てきた悟には、やはり偏屈としか思えないが、ここは直之助に敬意を払いその考えを一旦受け入れた。

「どうすれば、そんなに強くなれるんでしょう」

直之助は、小さく笑いながら首を横に振った。

「それは私が知りたいですよ。きつと、ほとんどの人が私と同じ答えのはずだ。でも、孝雄さんなら知っているでしょう。なんせ強い人ですから。そう言っても孝雄さんは、俺は強くねえ、と一蹴するでしょうけれど」

直之助が真似た孝雄の口調は、そっくりだった。

「でも、強くなるために必要なものはわかります」

歩きながら、直之助が言う。

悟は思いついたものを、いくつかあげた。

「忍耐、負けん気、信念でしょうか」

直之助は、小さく何度か頷く。

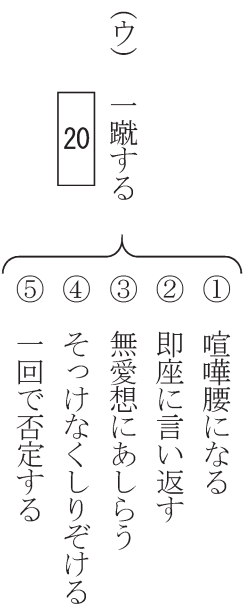
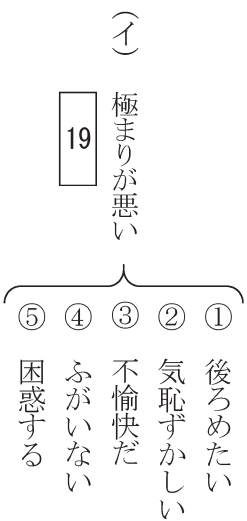
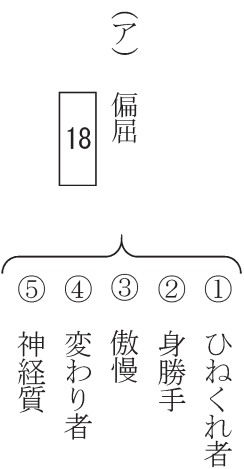
「たしかにそれらも必要でしょう。でも、私が思うものは少々違います」

C 直之助は、言葉を区切るようにつぶやいた。

「たとえば怒り、たとえば嘆き、たとえば悔恨——それらをすべて受け止められたとき、人は強くなれるように思います」

e 直之助の話は、なんだか住職の説法のようにうたった。わかるようでわからない。返事に困って黙っていると、直之助は話を、孝雄たちの馴れ初めに戻した。（柚月裕子『風に立つ』による。）

問1 傍線部(ア)～(ウ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選びなさい。 18、19、20



問2 傍線部A「直之助は、視線を自分の足元に落とし、独り言のようにつぶやく。」とあるが、このときの直之助の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。 21

- ① 糖尿病の家系であることを自覚して、若いころから摂生に努めてきたにもかかわらず、糖尿病になり制限が増えたことに、悔しい思いを抱いている。
- ② 父の跡を継いで社長になり、好きだった鋳物作りができなくなった自分と違って、職人の仕事に一筋に打ち込める孝雄のことを羨ましく思っている。
- ③ 岩手を代表する南部鉄器会社の会長という立場にある自分が、清嘉のような小さい工房の親方の孝雄に引け目を感じていることが情けなくなっている。
- ④ 思うようにやりたいことができなかった自身のこれまでを振り返ったうえで、信念を貫き通した孝雄を思っしみじみとした気持ちになっている。
- ⑤ 自分が敬愛する孝雄のことを、孝雄の息子である悟が理解しないで反発ばかりしていることが残念で、なんとか和解してもらいたいと考えている。

問3

傍線部B「直之助は、なにかを吹っ切るように俯き加減だった顔をあげた。」とあるが、ここからうかがえる直之助の心情を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

22

- ① 昔ながらの焼型をいまでも主軸にしていたら、と思わないではないが、焼型から生型へと切り替えてきたのは自分だけではないことを思い出し、気持ちを持ち直している。
- ② 焼型にこだわり続けた孝雄の選択は最良だったと思うが、時代を生き抜くために焼き型を捨て生型を導入した自分の選択もやはり最良の選択だったと思いを直している。
- ③ 自分の技術を思う存分発揮したいという職人の気持ちを無視する形にはなったが、南部鉄器が命脈を保ったのは生型を導入したからだと思ひ直し、強気になっている。
- ④ 生型と焼型にはそれぞれメリットとデメリットがあり、どちらがいいとか優れているとかという問題ではないことを強く主張しておきたいという衝動に駆られている。
- ⑤ 孝雄のように伝統的な技法を守り続けることができなかつたという負い目はあるものの、大手の会社では個人の工房と同じやり方はできなかつたと自分を鼓舞している。

問4

傍線部C「直之助は、言葉を区切るようにつぶやいた。」とあるが、このときの直之助の様子を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選びなさい。

23

- ① 孝雄の強さの秘密を自分に訊ねる悟に対して、知りたければ父親と直接話し合うべきだともどかしい思いを抱き、いま父親と向かい合わなければ後悔が残るということを、「たとえば怒り」「たとえば悔恨」などの表現で、婉曲えんきよくに伝えようとしている。
- ② いずれは孝雄の跡を継いで南部鉄器作りの職人になる悟に、自分と同じ過ちをしてほしくないという思いから、孝雄の強さをわかつてもらおうとしてきたが、話をしているうちに悟には悟の良さがあると気づき、悟に考える時間を与えようとしている。
- ③ どうすれば強くなれるのだろうかとまっすぐに聞いてきた年若い悟に対して、人生の先達として進むべき道を示してやらなければならぬという思いを抱き、自分がこれまで大切にしてきた人生の教訓を、ひとことひとこと明確に伝えようとしている。
- ④ 昔ながらの焼型にこだわり抜く孝雄の強さに敬意を抱いているものの、自分は孝雄とは違う強さを目指し、時代の変化に対する嘆きも、経営者として生型を戦力にしたことに対する後悔も、すべて受け止めていくという思いを、心に刻もうとしている。
- ⑤ 頑なにやり方を変えずにやってきた孝雄の強さや、職人としての技術の確かさをしっかりと認めつつも、このままでは清嘉が潰れてしまうと危惧する思いから、悟にその危機感を持つてもらうために、今後の心得を噛かんで含めるように話している。

問5

波線部 a～e の内容や表現に関する説明として **適当でないもの** を、次の①～⑤の中から

一つ選びなさい。

24

- ① a 「直之助は、付け足しのように笑う。」という表現には、冗談交じりだと示すことで、社長になった当時の回想を悟が重く受け止めてしまわないようにという直之助の思慮深い人物像が表れている。
- ② b 「ゆつくりと流れる川の向こうに家々の屋根が並び、その奥に岩手山が見えた。」という表現では、直之助のなかで揺るぎない存在感を持ち、憧れの対象である孝雄という人物が岩手山に象徴されている。
- ③ c 「川から強い風が吹いた。足元の雑草がいつせいに音を立てて揺れる。」という表現では、人生においては追い風だけでなく逆風に見舞われることもあるなど、運不運に翻弄される人々の姿が示されている。
- ④ d 「直之助は、遠くを見た。」という表現には、時代の変化にあらがえず、心ならずも昔ながらの焼型へのこだわりを捨てて生型を導入する決断をした当時の自分に思いを馳せる直之助の様子が表れている。
- ⑤ e 「直之助の話は、なんだか住職の説法のようにだった。」という表現には、自分にとって「あんな男」をほめちぎる直之助に賛同できず、納得しがたい思いばかりが沈殿していく悟の心情が表れている。